
Darker Than Black

Aruto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a r k e r T h a n B l a c k

【Nコード】

N 7 9 4 4 K

【作者名】

A r u t o

【あらすじ】

富士乃かぐやは、普通の少女だった。

かぐやは、三年前の事故をきっかけに記憶をなくしてしまう。

そして、記憶を亡くした代わりにある能力を得た。

その力とは……。

第一章

真冬。

外は凍るように寒く、風は荒々しく吹きつけ、冷たさが肌を刺す。そんな中、街はライトアップされクリスマスをド派手に演出させていた。

「いや、クリスマスつすよ先輩！」と栗色のセミロングの髪を揺らしながら振り返り、私に向かって笑顔で少女は言った。

「五月蠅い、見ればわかる」

私は、背中まで伸びた自慢の黒髪を指で梳き、面白くない、と言わんばかりに棒読みで言葉を返した。

「なんすか、寂すいゝいですね」

少女は私に微笑みながら言う。

「せっかくのクリスマスなんだからもっと羽を伸ばしましょーよ！」

「誰が哀しくてお前とクリスマスを過ごさないと行けないんだ？」

世間はもうじきクリスマスを迎えようとしている。

街中は大勢の人で賑わっており、その殆どがカップルだ。

その光景を見て私は安堵した。世界は今日も平和だと……。

クリスマスをよそに最近巷では妙な事件が多発していた。

それは、子どもの失踪事件。

夜、子どもが家で寝る間際までは家にいるのに床に着くと子ども忽然と姿を消しているらしい。

そんなのただのトイレや何かだろうと両親は、思ったのだから子どももその姿は一切目にしなかったそうだ。

搜索願を届けても未だに見つかっていないらしい。

今のところは八人の子も達がこの街中から姿を消している。

その家はどんなクリスマスを過ごすのだろうかと思えば、と思えば

き出した。

八人の行方不明者は全員が小学生と報道されていた。

男女は問わず失踪している。

そして、最近のネットでは、その事件のことを『チェンジリング』と名が称され騒がれている。

『チェンジリング』とは北欧で、有名な妖精の悪戯の事を呼んでいる。

小さな子どもを攫い別の子どもと入れ換えるものことだ。

今、この日本でも起こっているのかと思うとぞっとする。

しかし、何故こんな名称が着いたのかというと子ども達の失踪には前触れも無ければ手掛かりも一切掴めていないそうだ。

それに全ての事件共通の話で八人中八人ともが玄関からは一步も出ていないらしく、自分の部屋すら出ていないので親は朝になるまで気づかなかつたらしい。

妖精の悪戯……果たして本当にそうなのか？

最初の子どもが消えてから二週間が過ぎた。

ある日、突然失踪したうちの一人が家に戻って来て、気がついたらベッドで横たわっているのを母親が見つけたというニュースが報道された。

これを機に今まで失踪していた子ども達は、全員返ってきたそう

だ。
私は、少しだけ安堵し、疲れて鬱になった頭を抱え、帰って来て直ぐに身体を部屋のベッドへと預け眠りに入った。

子どもの泣き声が聞こえる。

薄暗く、狭い通路のような場所があり、棺桶が左右4つずつ並んでいた。

そして、その奥には人影がひとつ見える。

誰かがそこにいるのはわかるが顔まではわからない。

背丈から見れば多分、男。

ガンガン、と棺桶の内側から外側へ衝撃音が発せられる。

「出せ！ここから出せー！」

少年の声だ。

少年の声が狭い通路を反響し響き渡る。

「黙れええええ！」

ガンツ、と男は吼え、男の手前側にあった棺桶を蹴り飛ばした。

子ども達はひいッ、と小さく脅え、薄暗く狭い通路にまた恐怖という静寂が訪れる。

「ふふふ……あと、あと少しだ……見ていろ桐崎いい——！」

男の薄気味悪い笑い声がひっそりと聞こえた。

私はいつも通り朝7時に目を覚ました。

眠っていた気だるい身体をゆっくりと起こす。

また嫌な夢を見てしまった。

男と8つの棺桶、その棺桶の中から聞こえる八人の声……。

全ての棺桶からは子どもたちの声が閉鎖された空間に響き渡っていたのを思い出す。

子どもたちは、助けを求めひたすら泣き叫ぶ。

（お母さん、お父さん！）

（助けて……怖いよ。家に帰りたいよ！）

その助けを求め続ける声が頭の中を過ぎる。

この夢は、あの失踪事件に関係があるのかと考えていたらここで本日、二度目の目覚まし時計が鳴った。

「あつ、もう7時半！？」

私は、ぼけーっとしていた頭を振り払い、布団がか飛び出した。

「うわー遅刻遅刻」

まず制服に着替え鞆を片手に部屋を出る。

そして、洗面所に駆け込んだ。

私は急いで身なりを整え、すぐに家を出た。

「行ってきます」と小さくそう言い家を後にした……。

家を出るときに返事は返ってこなかった。

それは一人暮らしだからだ。

両親は、三年前に死別した。

三年前、両親は14年目の結婚記念日だからと言って本来二人で行くはずであった旅行に何故か私も誘ったのだ。

私は嫌がったが母親のしつこい要望のせいで抵抗はしたのだが結局行くはめになってしまった。その帰り際に事件は起きた。

その日は、高速道路に深い霧が発生していたのだ。

そして、視界が狭い中を目を懲らし運転していた父の前に一台の大型トラックが突っ込んできた。

父は咄嗟にハンドルを左に切ったが突っ込んできたトラックを避けきれず、私たちの乗る車のフロント部分に斜めから突っ込んだ。

どんつ、と大きく鈍い音に続きそのまま金属を地面に擦り付ける音が鳴った。

そこで私の記憶は途切れている。

この後、助かった私は病院に運ばれて検査を受けた。

事故の衝撃で大きな怪我事態はなかったらしいが頭を強く打ったらしく私は記憶喪失となった。私、以外は死んだ。

親戚の人がいうには、トラックは運転席と助手席の部分を飢えた獣が餌を喰らい尽くすかのように押し潰してしまっただけらしい。

ああ、それは即死だな、としか思わなかった。

だから、私はその話を聞いても涙ひとつ流せなかった。

今の私は最低限度の生活を送る記憶しか残っていないのだ。

いくら親の死でもを悲しむだけの余裕は存在しなかった。

なんせ記憶喪失だ。親の顔すら思い浮かばない。いや、親の顔だけが浮かばなかったのだ。医者曰く、事故のショックによる断片的

な記憶の欠落だと説明されたがパニックにはならない。そんなこと今の私の中では大事でも何でもなかった。

全てが今の自分からしてみれば煩わしかった。

ある日、退院が迫った時、父の母親つまり私の祖母に当たる人が私を訪ねてきた。そして、私の顔を見るなり泣き出した。ぽろぽろと大粒の涙を流しながらごめんよ、ごめんよと言って私の手を握り続けた。

祖母は泣き止むと自分の家に来ないかと言ってくれた。中学生の女の子が一人で生きていくのは無理だ。だから、保護者として一緒に暮らそうと言ってくれた。

しかし、私はその申し出を断った。

別に祖母達と暮らすのが嫌った訳ではなく、ひとりになりたかったから断った。

今の私の家に帰り暮らしていれば記憶は案外すぐに戻るかも、という言い訳を言ったらすんなりと了承してもらえた。その代わり、医師から定期的にカウンセリングを受けるようにという約束をさせられた。しかし、この煩わしい日常をすぐさま静かにさせられるならそれもよかった。

だから、私はその条件を呑み、一人暮らしという環境を手に入れ、一週間に一回の病院通いという義務を得た。

そして、今に至ると言うわけだ。

私は事故から病院に通ってかれこれ三年ちよつとになる。

最初は病院の精神科に通っていたが時が経つに連れて病院ではなくてもよいと医師に判断されここ最近では、メンタルクリニックに通うようになった。

自宅から少し歩き駅から電車をふたつ乗り継いで一時間かけてク

リニツクに向かう。向こうの駅に着くと建て壊しの決まったビルや団地がいくつも並んでおり、一五分くらい歩き廃墟を抜け出すと薄暗く立ち並ぶ住宅街の中ひとつだけ一際目立つ白い建物がある。

そこが私の通うクリニツクである。中に入ると四十代後半の女性を受け付けに立っていて、いつも通りに診察券を渡し五分くらいして名前を呼ばれた。

立ち上がり私は、診察室の扉を軽く叩くと「はい、どうぞ」という女性の声が返ってきた。

中に入るとそこには二十代後半の女性がいた。

長い黒髪を背中中でひとつに結わき、両耳には、蒼く、美しい色鮮やかなピアスを身につけていた。そして、整った顔はまさにこれぞ、大人の女というものを思わせる。

「こんにちは、今日、私は畑山先生の代理で来ている桐崎です。よろしく」と女性は軽い挨拶を交わし診察へと移ろうとペンを取る。

いつも私の診察は畑山先生という白髪がよく似合う年輩の男性が担当するのだが、どうやら今日は先ほど彼女が言ったようにこの桐崎という医師が担当するようだ。

桐崎先生は、ペンを握っている逆の手を返し、ジェスチャーだけで私に丸い椅子に腰かけるようにと示す。軽く頷き、私は腰を下ろした。

「記憶喪失」

桐崎先生は単語を口にするかのようにそう呟いた。

「またの名を記憶障害という。これは記憶を思い出すことができない、また、新たなことを覚えることができないなどといった記憶に関する障害の総称だ。一時的に思い出すことができない記憶は短期記憶障害、長期間思い出すことができない記憶は長期記憶障害と言つように呼ばれ、パターンはこの二通りがある」

「はあー？」

「記憶とは、『記録』、『保持』、『想起』の三段階から成り立っていてね、『記録』機能により覚え込み、『保持』機能で維持し、

『想起』機能によって思い出すということができる。短期記憶障害には、一般的にも知られている記憶喪失が挙げられんだけど、記憶の障害は、大きく分けると記銘障害と、想起障害とに分けられているんだ。先にあげた分類だと、記憶喪失は記銘障害、認知症は追想障害に分けられているんだ。原因は、何らかのケースで脳が損傷した場合に引き起こされることが一般的かな。例えば、交通事故による外傷性の場合や脳梗塞のような内因性による場合、高次脳機能障害による場合もあるし、うつ病や統合失調症などの心因性である場合も少なくはないよね。最近では今、言った心因性が年々増えてきているかなー？」

そう言って桐崎先生は、椅子から立ち上がり、窓側に置かれたコーヒーマーカーの取っ手に手を掴み、置かれた二つのマグカップにコーヒーを注ぐ。

二つのうちの一つを私は、受け取り、口に含む。

苦ッ！？、とあまりの苦さで軽く咳き込んでしまった。ああ、ごめんごめん、と先生は白衣のポケットから砂糖とポーションミルクを取り出して、私にくれた。

「だけど貴女は、どちらでもないと思う」

「へっ！？」

「貴女は、どちらでもないよ。さっき、説明したけど本当に貴女がその類のモノを持っていたのなら少なからず生活に戻るのに一時的だけどりハビリがいるはずなんだ。ほんの僅かでもな。しかし、それを受けずにいきなり社会復帰をして混乱ひとつないというのは、どうみてもおかしいんだよ」

「じゃあ、私は記憶喪失や他の記憶障害などではない、と？」

「ただ忘れているだけなんじゃないか？」

「忘れている？」

「ナニヲ？」

「まあ、今話しても混乱するだけだろう。とりあえず、今日のところは帰った方がいい。また、話そう」と言って桐崎先生は私を診察

室から出そうとしたところで、そうそう、とポケットから名刺入れを取り出し、その中から一枚抜き取り、裏面に何かのマークを書いて私にくれた。

「持つて行きなさい。もしもの時、いろいろ役に立つ。次の診察からはここではなく、私のところに来て欲しい。じゃあ、気をつけて」
そう言っ て診察室の扉は閉められた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944k/>

Darker Than Black

2010年10月28日05時09分発行